

CJL で学ぶ学習者のためのレベル判定テスト開発

寅丸 真澄

井下田 貴子・伊藤 奈津美・岩下 智彦・沖本 与子

設置主旨

本プロジェクトの目的は、早稲田大学日本語教育研究センター（以下、CJL）における日本語レベルを日本語学習者（以下、学習者）が自身で把握できるようにするためのテストを開発することである。本テストの開発、実施により、学習者が自ら日本語レベルを適切に把握できるようになれば、CJLにおいて展開されている多様な日本語科目を容易に選択できるようになるとともに、教師の授業運営が円滑になる。また、他学部において行われている留学生に対する日本語科目の履修単位指導にも寄与できると考える。

1. プロジェクトの目的と経緯

本プロジェクトの目的は、早稲田大学日本語教育研究センター（以下、CJL）における日本語レベルを日本語学習者（以下、学習者）が自身で把握できるようにするためのテストを開発することである。

CJLでは、学習者の自律性を尊重し、所謂プレースメント・テストは実施せず、学習者自身が日本語学習の目的とレベルに合わせて科目選択を行うことが推奨されている。そのための判断基準として、これまではJ-CATとCJLの1～8レベルを紐づけた対照表を利用していた。学習者は、科目登録前にJ-CATを受験してそのスコアをもとに自身のレベルを特定し、履修科目を選択していたのである。しかし、2020年度よりJ-CAT受験に関わる手続きに変更が生じる可能性が発生した。そこで、それを契機に、CJLの学習内容をより反映したテストを開発し、その得点により学習者が自身の履修レベルを判断できる環境を整備する方向性が検討された。その結果、CJLでは、2018年度に独自のテスト開発を行うことを決定した。その後、テスト・システムの選定や問題数、形式等の枠組みの検討、項目作成等の準備を行い、2019年度よりCJL設置科目履修者を対象に試用を開始した。

本プロジェクトで開発するテストは、「CJLレベルチェックテスト（文法・語彙）」「CJLレベルチェックテスト（漢字）」「CJLレベルチェックテスト（聴解・読解）」の3種である。本報告では、それぞれ「文法・読解」「漢字」「聴解・読解」と記述する。

これらのテストの開発、実施により期待されることとして次の4点が挙げられる。第1に、学習者が自身の日本語レベルを適切に把握できるようになれば、CJLにおいて展開されている多様な日本語科目を自律的に容易に選択できるようになるということである。第2に、学習者個人のレベルが把握できれば、これまで学習者のレベル差が可視化されず支障をきたすことがあった授業運営が円滑になるということである。第3に、現在のコース内容に即した学習者の習熟度の把握が可能となり、今後のコース開発のための検証に役立つ

つということである。そして第4に、学習者の日本語レベルが数値的に可視化できれば、他学部において行われている留学生を対象とした日本語科目の履修単位指導にも寄与できるということである。

2. 2020年度の活動計画

2019年度は、総合日本語科目1～6レベルの履修者を対象に春学期に「文法・語彙」（総合日本語1-2・集中日本語1-2：60問セット，総合日本語3-6：90問セット），秋学期に「文法・語彙」（総合日本語1-2・集中日本語1-2：45問セット，総合日本語3-6：90問セット）と，漢字2～5レベルの履修者を対象とした「漢字」（漢字1-5：90問セット）の試用を行い，解答の分析とテスト項目・形式の改善を進めた。「文法・語彙」および「漢字」におけるレベル別の平均正答率，および標準偏差の分析結果から，学生のレベル判定指標としての有効性が証明された。また，テスト開発の過程で，他学部内における履修科目指導上の基準となる上級者向けテストの作成要請があり，「文法・語彙」「漢字」に次ぐ「聴解・読解」として，2019年度秋学期より聴解問題および読解問題の作成に着手した。

2020年度は，以上のような2019年度の活動を受け，(1)受験者能力の弁別に寄与していない項目や想定した正答率と異なる難易度の項目を入れ替える，(2)2019年度同様「文法・語彙」「漢字」の調査試用を行い，分析および問題セットの精度を高める，(3)「聴解・読解」問題作成後，調査試用と分析を行うという3点が計画された。

3. 2020年度の活動実績

2020年度は，活動計画に挙げられていた3点の活動を行った。まず，2020年度春学期，「文法・語彙」（総合日本語1-6：90問セット）においては，新入生を対象として学期開始前に事前受験を，総合日本語2～6レベルの新入生・在校生を対象として授業期間中に授業内受験を実施した。「漢字」においては，新入生・在校生を対象とした事前受験と学期末の授業内受験を実施した。春学期は，COVID-19拡大の影響により春学期の授業開始が1か月以上遅れたため，テストの実施も混乱を極めたが，「文法・語彙」「漢字」ともに授業内受験を行うことにより，一定の調査協力者数を確保することができ，調査分析を円滑に進めることが可能となった。これらの収集データの分析の結果，「文法・語彙」「漢字」ともに一定の妥当性と信頼性が確認できた。そのため，2020年度秋学期は，新入生を対象とした事前受験とともに，新入生・在校生を対象とした学期開始時の授業内受験を実施した。なお，2021年度より新入生・在校生を対象とした事前受験のみ実施することとし，科目登録のための日本語レベルの把握という本来の目的に適った本運用を行う予定である。

一方，「聴解・読解」については，2019年度より開始した問題作成作業を完成させるとともに，聴解テストの音声収録を行い，春学期終了後にパイロット調査を実施した。「聴解・読解」については読解テキストの掲載方法や，聴解素材における一部音声の明瞭性に対する懸念が生じたが，パイロット調査は円滑に行われ，問題内容の妥当性と信頼性が確

寅丸真澄・井下田貴子・伊藤奈津美・岩下智彦・沖本与子／
CJLで学ぶ学習者のためのレベル判定テスト開発

認できた。そのため、2021年度からの本運用を決定した。なお、「聴解・読解」完成までの経過措置として、総合日本語6レベル修了相当の質と分量を想定したアカデミック・レポート作成の課題を課し、その評価基準および評価方法の策定も順調に進んだ。アカデミック・レポート作成課題も、学習者の日本語能力の測定に一定の成果を上げたが、2021年度以降は「聴解・読解」テストに代替される予定である。

4. 2021年度の計画

2021年度は、「文法・語彙」の等化、および20年度に完成した「聴解・読解」の2冊子化を行う計画である。

具体的には、作成済の「文法・語彙」の問題セット3冊のセット間の難易度レベルの標準化、及び将来的な問題セット変更作業時の妥当性・信頼性の維持のため、近年、テスト理論のスタンダードとなったIRTを用いて等化の作業を行う。これにより難易度が均等な問題セット3冊が確定する。

また、「聴解・読解」に関しては、繰り返し使用による項目露出に対応するため、すでに完成している項目に新規項目を加えた問題セットを使用して調査、分析を行い、その結果に基づき「聴解・読解」の2冊子化を行う。

5. 日本語教育研究センター事業との関連性と研究成果の還元方法

本プロジェクトの成果は、先述したように、学習者、日本語教員、CJL、他学部・他箇所に対して次の点において還元しうると考えられる。

- (1) 学習者が多種多様な日本語科目を自律的に容易に選択できるようになる。
- (2) 履修者の日本語レベルが明らかになるため、教師の授業運営が円滑になる。
- (3) 調査結果は、現在のコース履修者の学習成果を反映しているため、今後のコース開発に役立てることができる。
- (4) 他学部・他箇所において、日本語科目の履修単位の指導が実施しやすくなる。

これらはCJLの課題、すなわち、学習者の自律性の尊重と自律学習の促進、クラス内のレベル差への対応が深刻な課題となっている教室運営の負担軽減、今後のコース開発、全学の日本語教育に関わる他学部・他箇所との連携という4つの課題に対応している。本プロジェクトは、テスト開発という観点においてCJLの課題解決の一助になりうることから、CJL事業に深く関連するとともに、その研究成果をCJLの現場に十分還元しうると考える。

(とらまる　　ますみ、早稲田大学日本語教育研究センター)
 (いげた　　たかこ、早稲田大学日本語教育研究センター)
 (いとう　　なつみ、早稲田大学日本語教育研究センター)
 (いわした　ともひこ、早稲田大学日本語教育研究センター)
 (おきもと　ともこ、早稲田大学日本語教育研究センター)